

お女郎蜘蛛

宮本百合子

青空文庫

若い娘の命をとる事もまつしろな張のある体をめちやめちやにする事でも平気なかおでやってのける力をもった刀でさえ錦の袋に入つた大店の御娘子と云うなよやかな袋に包まれて末喜の様な心もその厚い地布のかげにはひそんで何十年の昔から死に變り生きかわりした美くしい男女の夢から生れた様なあでやかさばかりを輝かせて育つた娘の名はお龍と云う。十五六の頃からチラツと心の底に怪しい光りもののあるのを親達は見つけた。その光りものが大きくなつた時に起る事も親達は想像する事が出来た。娘の心の中にすむ光りもののささやかに物凄いキラメキを見るにつけて年とつた二親は自分達の若い時の事を考えさせられた。母親は

十八の時親にそむき家をすててしようばいがたきのここの家の今の主人の前にその体をなげ出した。自分の生れた家の「時」と云う恐ろしい力づよいものにおさえつけられて段々とのれんのかたむくのを思う男の店の日にまし榮えて行くのと見くらべて白い歯を出して笑った事等が新しい事の様に目前にくりひろげられた。

「私達はこれから仇うちをされるんだ」二人は老いて骨ばった手をにぎってこんな事を思った。

お龍の心に住む光りもののひろがる毎にその美しくしさはまして昔から話にある様な美しくしさと気持を持って居るのを知ったのは二親きりではなかった。いきな模様の裾長い着物に好きでかつら下地にばかり結って居た様子はそのお白粉気のないすき通るほど

の白さと重そうに好い髪とで店の若いものがせめてとなりの娘だつたら附文位はされようものと云つたほどの、美しくしさをもつて居た。

十六の時自分の名がお柳と書くのをいやがってどうでも「お龍」とかく様にしろとせびつていろいろ面倒な手つづきまでさせてお龍と書く様にしてもらつた。しおらしくみどりの糸をたれる柳、まして三十三間堂のお柳と同じ名で自分の心とはまるであべこべだと云つていやがつたのだ。

「女は柔しい名の方がどれだけいいんだか……」

私の若い頃は名のおんまりすごい女はいやがられたもんだ……」
母親が娘の苦情をきいた半に斯う云つた。

「ソウ、咲くかと思えばじきにしぼんで散ってしまふ花——じきにとしよりになる様なお花なんて名がいいんでしようか。でも、わたしやお龍がすきなんだもの。龍があゝの黒雲にのつて口をかつとひらいて火をふく所なんかはたまらなくいいけどもマアただの蛇がまつさおにうろこを光らして口から赤い舌をペロリペロリと出す事なんかもあたしやだいすきさ、いいネエ……」

そのすぐく光る目をあこがれる様に見はつてお龍は斯う云つて母親が顔色を青くしたのをまっくろな目のすみから見て居た。細工ものの箱に役者の絵はがきに講談本のあるはずの室には、壁一つぱいに地獄の絵がはりつけてあり畳の上には古い虫ぼんだ黄表紙だの美しい新□ものが散らばつてまっかになつた箱の中には

勝れた羽色をもった蝶が針にさされて入って居た。

そんな事も母親に何とはなしに涙ぐませるには十分な事だった。高等を卒ったつきりであとは店のものに気ままに教わって居たけれ共教える任にあたった若いものは娘のつめたい美しくしさに自分の気の狂うのをおそれてなるだけはさけて居た。お龍は男が鉛筆をにぎって居る自分の横がおを見つめてポーツとかおを赤くしたり小さなため息をついたりして居るのを見ては、それが面白さに分るものをわざと間違えてかんしやくを起したふりをして弱い男のオドオドしてただなさけなそうにうつむく様子を見ては満足のうす笑をして自分の部屋に入るのが常だった。

手あたり次第に小説をあさってよんで居たお龍は末喜を書いた

小本を見つけた。さし絵にはまばゆいほど宝石をちりばめた冠をかぶつて、しなやかな体を楼の欄にもたせてまっかな血を流して生と死との間にもがき苦しんで居る男をつめたく笑つて見て居るところが書かれてあつた。さし絵のものすごさにつりこまれてお龍は熱心にそれによみふけた。一枚一枚と紙をまくつて行くお龍の手はかすかにふるえて唇は火の様に赤くなつた。そしてそのまっしろなかおは白蠟の様になつた。一字一字とたどつて居るうちに自分の氣持とこの中にみちて居る氣持とあんまりぴたり合うのにおどろいた心を底の方からうずく様な何とも云われない氣持が雲の様に湧き上つて来た、自分の心を自分で考える様にお龍はジーツとうつむいて居た。何事かをさとした様に、教えられた

様に「私は特別に作られた女なんだ、死ぬまで男の血をすすって美しくしておられる力をもつて居る」凄く光る眼に宙を見て形のない或るものに誓う様にお龍は云った。ホツト息をついてポンとひざの本に本をなげた時にはもう障子の紙はうす黒くなって居た。午すぎすぐから今まで息もつかずによんで居た自分の真面目さと新らしい気持になったうれしさにはれやかな高笑をした。それと一緒にうすくらがりの部屋のわきからはじき出された様にヒラツと影をのこして体をかくしたものののあるのをお龍は見つけた。首すじの細さでその影の持主をさとした娘は何か心にひびいた事があるらしくそれよりももう一層高い笑い声をたてた。

恐ろしくすんだ声はびっくりするほど遠くひびいた。自分の笑

い声の消えて行くのをジツとききながらその声をきいて身ぶるいをする男のあるのを思つて声はたてないうす笑をもらした。

お龍は立ち上つて着物を着更えた、今までよりは一層はでなはつきりした着物と帯をつけお化粧もした顔と姿とは倍も倍も美しくなつた。鏡の中にはほ笑んで居る自分の姿を一寸ふりかえつてお龍はスルスルと廊下に出て足音もさせずにさきをすかしすかし店のそとの倉前に行つた。つめたい石段に頭をかかえて深い深いとかむことのない海の底にひきこまれた様な重い氣持で思い込んで居た若い男は自分の傍にお龍の立つて居るのなんかは知るだけの余裕がなかった、「主人の娘だ、あんなひやつこい様子をして居るから何かしたらきつとおっぴらにしてしまふにきまつてる、

それにまだ年も若いんだし——」こんな事はお龍を氣を狂いそうにまで思つてゐる若い男の心をなやました。

男は自分がこんな苦しい思をして居るより、一思いにこの家を出てしまおうとも思つた。あの美しくしさを一目でも見ずにすごすと云う事はとうてい自分のこらえられそうにもない事であつた。

男の熱しきつた心は、見すかすように高笑いされた事やら□□見て居た娘の燃えて居た事やらを思つてジツとして居られないほど大声で叫びたいほど波打つて居た。

頭は火の様にほてつて体はブルブル身ぶるいの出るのをジツとこらえて男は立ち上る拍子にわきに何の音もさせずに立つて居たお龍を見た。男は前よりも一層かおを赤くしすぐ死人よりも青い

かおになつてうるんでふるえる目でジツと娘のかおを見つめた。娘もその若い人にはたえられないほどのみ力をもった目をむけて男の瞳のそこをすかし見て居た。二人の間に時はきわめて早く立つて行つた、男は力のぬけた様にうつむいた。女はまだそのうつむいた瞳をおつて行つた。お龍はかちほこつた様に眉をかるく動かしてダラリと下げて居る男の両手を自分のひやつこい雌へびの肌ざわりの様な手の中に入れた。男の体は急にふるえ出した。さわぎ立てる血が体中を走りまわるのや髪の毛までまっかになった様な姿を女はかお色一つかえず髪一本ゆるがせないで見る事が出来た。男はすじがぬけた様に手をもたれたまんまとの石段にくずおれてしまった。

「御はなしなさって——」

かすかなとぎれとぎれの男の声に耳もかさないうで御龍はますます手をかたくにぎりしめた。男の目から涙のこぼれ出て居るのを見つけて、

「蛇に見こまれたと思ってればいい……」

さえた低い声で女はささやいた。

「どうぞ——御なぶりなさらないで……」

男は前よりも一層力のない声で□つた。

「はなさない、どんな事があつても、二人ともが骨ばつかりになつた時でも——」

お龍は斯う云つたまんま動こうとも手をはなそうともしなかつ

た。

はげしく動く感情、涙をこらえるために情ないほどかたくしまった頬の筋、自分を恐れて手をもぎはなすほどの力さえない男の気持を、女はかがみの中にうつす様に自分の心にうつし見てまっしろに光る倉の扉にほほ笑みをなげた。

赤坊があきのきたおもちゃをポンとほうり出す調子にお龍は自分の手から男の手をはなした。白い二本の手は又先の様にだらりと両わきに下った、男はうつむいた目を上げてチラツと女を見あげて又食入った様に下に向いた目を動かさなかった。お龍はジツとうす闇の中にうく男のかおを見た。白い細い指が顔をおさえて指と指とのすき間にかすかな悲しみの音のもれてくるのを見て女

はするりとまぼろしの消える様に行ってしまった。男は荷物もちあつかう様に石段の上に自分の体をなげて長い間ほんとうに長い間今のは夢ではあるまいか？　いたずらをされたんじやあるまいか？　どうしてあんな気持になって呉れただろう？　と思つて、心も体もとけて行きそうなうれしさと限りない恐れとかなしみとよろこびにふるえて居た。

それからうす明りの倉前に立つ二人の若い姿を見るものは着物をしまいに来た女中の一人二人ではなかった。傘の下に二つのおが並んだ絵の倉の扉に爪で書いてあるのもお龍は知つて居た。日毎に男の瞳はぬれてうるんで力がなくなつて行つた。かるいため息をつきながらフツと思ひ出してうす笑いをする男の様子を不

思議に思わないものはなかった。

三月ほどあとにいきなりこの店から男は追われる事になった。前の晩一晩倉前のつめたい石の上で泣き明した青白い面やせた力ない男を前に置いてお龍は父親に代つてと云つて最後の命令をあたえた。男は涙をぽろりと一つひぎにこぼしてうるんだ目に女を見あげて二三步ヨロヨロと女に近づいたまんま一言も云わず何のそぶりもなくつて再びこの店には姿を見せない様に出て行つた。死に行く様な男の様子を見て女は美しい齒の間から「フフフ」と云う笑をもらした。家中この事をきき又見たものは主人にも可愛がられて居たのにと、気になる謎をときにかかったがどうしてもとく事の出来ない事だった。ただお龍と云う名をある力をもつ

た特別の人の様に思った、そしてその美しい姿が見えると人達はサツとはいった様にかたまり合つてまぼしい様な姿を眼尻の角からのぞき上げた。

そんなウジウジした様子を見るにつけて御龍は自分の体の中に心の中に住んで居る光り物を可愛がつた。

まだ十六のかおにはもう男と云うものを知りぬいた女の様なさめたとのつた影がさして居た。

親達は、お龍を自分の娘だと思つて見るのにはあんまりすぎすぎた。なるたけ手をふれない様に、なるたけ光りものをよけいにひからさない様にと、火薬を抱えた様な氣持で居た。逃げ様としてもにげられない因果だと二人は暗い氣持になつて一家の運命と

云う言葉におびえて居た。この家をもう幾十年かの間つづかせる
と云う事はいくらのぞんでも出来ない事だと親達はあきらめた。
力ない目で凄く凄くとなつて行く娘をふるえながら見て居るより
ほかにはなかった。十七の春、すぐ近所の小ぢんまりとした家に
御氣に入りの女中と地獄の絵と小説と着物と世帯道具をもつて特
別に作られた女はうつった。世なれた恥しげのうせた様子で銀杏
返しにゆるく結つて瀧縞御召に衿をかけたのを着て白博多をしめ
た様子は、その年に見る人はなく、その小さな国の女王としても
又幾十人の子分をあごで動かす男達の姐御としても似合わしいも
のだった。

壁の地獄の絵の中の火はもえて脱衣婆は白髪をさかだてて居る、

不思議な部屋で齒のまつしろな唇の真赤な女は自分の力を信じてうす笑いをして居る事がよくあつた。

女の机の上にはいつでも短刀が置いてあつた。虹をはく様なその色、そのかがやき、そのさきのほそさ、ひやつこさ、等がそれに似寄つた心をもつて居るお龍の氣に入つて居た。まじめにまじりつけのない氣持でお龍のところに通つて来るまだ若い男があつた。お龍はいつもと同じ様にその男に自分の力をためしてはほほ笑んで居た。馬鹿にしたほほ笑みも男は嬉しく思つて笑いかえして居た。男はごくまじめな正直な様子をしてお龍のところに来た。一事口をきくにでもお龍が上からあびせかけるのを下から持ちあげて返事をしお龍の見下して笑うのを男は見上げて笑い返して居

た。

「これあんたにあげましょう」

人を馬鹿にした笑いを目の中にかせて女は机の上の短刀をぬいた。

「エ、何にしに、……死ねと云うんかい……」

男は瞳をパツとひろげて云った。

「フフフどうか一度は死ぬ命ですワ、お互さまに……ねーえ」

根生わるく男の目のさきでピラつかせながらこんな事を云った。
美しい眼をすえて刃わたりをすかし見ながら、

「あたし今何でも思う通りに出来るのよ。あたしは今お前の首を
犬になげてやる事も出来れば空をとぶ鳥に放つてやる事も出来る

のよ。犬がほつてにげたら空の鳥が来てたべるだろうワ。……ねえ」

すんだ声で女は云った。男は芝居の科白を云つて居ると思わなかつた。

「何云つてゐるんだろう……気味の悪い人だ、そんなにおどかさずにおくれ」

「おどかしてあげる、——どこまでもあんたが弱つてへとへとになつて死んでしまうまで」

「そんな美しくいかおをしてそんなこわらしい事を云うのは御よし……」

「およしだつて、貴^あんたは私になんでも御よしと云う事は出来な

いと思つてらっしゃい。エエそうだ私は世の中の男をおどしてビツクリさせて頓死させるために生れて来たんですもの——」

「お前、恐ろしくはないんかい。マア、そんな事を云つてホンとうに娘らしくない」

「恐ろしい、世の中に恐ろしい事なんかはありやあしませんわ」

「私は今までにないほどの男にかける呪を作ろうと思つてるんですもの、わら人形に針をうつ様なやつこいんじやあないのを……呪——好い響をもつた言葉でいい形かつここの字だ事」

男はおびえた眼色をしてこの話をきき女は勝利者の様な眼ざしをして話した。

「いやな事云うのはもうやめにしてどっかへ行こう、サ、私は後

がひやつこい様な気がする——」

「そうでしょう、そのはずだ、あんたの後には短刀をにぎつてかまえてるものがあるんですもの……」

「そんな事ばかり云つて居ずと、……サ、どっかに行こう」

地獄の絵のかかつて居るところ、短刀のあるところ、女の力の存分に振りまわされる所にたった一人男と云うまるで違った気持と体をもった自分が居ると云うことはキュツと一ぺにくびられてしまいそうな、ほんとうに首をほうられそうな気がしてならなかった。自分も同じ男の沢山見えるところへ早く行きたいと思つてしきりにせめたてた。女はそのせかせかした男の瞳を見ては笑つて居た。

それから間もなく水色のお召のマントに赤い緒の雪駄、かつら下地に髪を結んで、何かの霊の様なお龍と男はにぎやかなアスファルトをしきつめた□通りを歩いて居た。通る男も通る男も皆自分からお龍をはなしてもって行きたそうに思われた、そして又女も自分より外の会う男一人一人を知って何か目に見えない声で話し合つて居る様に思われた。自分より二寸ほど低いところにある女の瞳を男はいかにも弱々しい目つきをしてながめた。男が見た前から女は男のキョトキョトした様子を見つめて居た。ジツとのでき込んだ男の瞳と動かずにある女の瞳とはぶつかつて男はふがいなく目をそらしてしまわなければならなかった。

「わたしやもうあんたとあるくのがやになった——」

お龍はフツと立ちどまって斯う云つてサツサツと向う側を一人でわき目もふらずに歩いた。女がこんな風をするのはただあたり前の女が半分あまつたれでするのは違つて何となくおそろしいものの様な気がして男はすぐにも追つて行つて又ならんで歩きたかつた。けれ共自分は男だと思つたと女、たかが十七の女に自分の心を占領されて居ると云う事をさとられるのはあんまりだと思つてともすれば向く足をたちなおしたちなおしあべこべの道を行つた。お龍とすれ違う男と云う男は皆引きつけられる様に行きすぎたあともありをはばかりながら振り返つて居るのを男は見えて、どうしても独りで歩いて居ることは出来なくなつた。

「何だ！　いくじなしにもほうずがあらうワイ、ハ！　馬鹿馬鹿

しい——」

自分で自分の心を男は罵つて見たが却つて女をふり返りふり返りして行く男達がねたましくなつて「あの女は己のものだぞ」と男達に見せつけたい氣がますますばかりだった。口で云えない様な強い力をもった女と面と向つて居るのがおそろしくて男と云う自分と同じ心と体をもったものに会いたさにわざわざ出かけて来たのに男の心には却つて辛い思がますますばかりであつた。ひろい道を斜によぎつて男はお龍のわきにびったりとよりそつて歩いた。

女は笑いもしなければ頭も動かさないで女王が舌をきられたあわれなどれいを御ともにしてあるいて居る様な氣高さと美しくさを見せて居た。男はどうかしてそのいてついた様な女のかおの

一条の筋肉でも自分の力で動かして見たかった。外套のかげから水色のマントのかげの象牙ぼりの様な女の手をさぐってにぎった。しらんかおをして居る女のよがおを見ながらソツとにぎりしめるとひやつこいするどい頭の髄まですき通す様な痛さがあたえられた。男はハツと手をひいて一足わきによつて女を見た。女のうす笑をする齒は青いほど白い。

男の頭の中にはさつき見せられた短刀の事も毒藥を注射する針のするどさの事もおびやかさせる様に思い出された。心臓に重いものがかぶさった様な気がして来た。死にかかった人がする様な目つきをして手をのぞき込んだ、きずはついて居ない、ただ青い手の甲に咲いた様にルビーを置いた様にコロツとした血がほんの

一つぴりたまつて居るのを見つけた。

男はそれを見て急に痛のました様にチューチューとそこを吸つて紙でふいて外套の中にしまった。何でどうしたんだかどうしても分らなかつた。

「フフフフフ」

鼻の先でとび出した様に女はそれを見て笑つた。その声をきいた男は腹だちながら考えながら、「ヒヒヒヒヒ」と笑い返さないわけには行かなかつた。恐ろしさと又何とも云う事の出来ない様な感情におそわれて男は口をきく事が出来なかつた。だまつて女の傍にならんで歩いて居るといきなりよろけるほどに男はこづかれた。

ビツクリした目を女に向けると水色から生えた様に出して居る手の指先に何か光つて居る。歩く足をゆるめるとそれが紫の糸の通つて居る絹針だと云う事とその先に一寸曇つて血のついて居るのが分つた。それと一緒に自分を射したのも分つた。男はそれをとろうとすると女はつばやく手をひっこめてどこか分らないところのにぎつてしまった。男は手を出したら又刺されそうに思われたんでそのまんま又歩き出した。男は、女の前ではどんなに気を張つてもうなだれる自分の心をいかにもはかないものに思つた。

「別れつちまえ下らない、お龍ばかりが女じゃあありあしない：

…」

斯うも思つたけれ共、それはごくほんの一寸の出来心で世間知らずの娘が一寸したことで死にたい死にたいと云つて居ながら死なないで居ると同じな事でやっぱりそれを実行するほどすんだ頭をもつて居なかつた。

あてどもなく二人は歩き廻つて夜が更けてから家に歸つた、ポーツとあつたかい部屋に入るとすぐ女はスルスルと着物をぬいで白縮緬に女郎ぐもが一つぱいに手をひろげて居る長襦袢一枚になつて赤味の勝つた友禅の座布団の上になげ座りに座つた。浅黄の衿は白いくびにじやれる蛇の様になよやかに巻きついて手は二の腕位まで香りを放ちそうに出て腰にまきついて居る緋縮緬のしごきが畳の上を這つて居る。目をほそくして女はその前に音なく

座つて居る男を見つめた。

「そんなに見つめるのは御よし、私しや生きて居る人間で鏡じやあない」

「ほんとうにいかにも人間らしい男らしい方ですわ、男のだれでももつて居る馬鹿な事をあんたはちやんともつてるんですもの——ねえ」

女は笑いながらこんな事を云つた。胸のフツクリしたところにさつき自分をつついて居た針の光つてゐるのを見つけて

「針を御すて早く、あぶない」

と男は不安そうに云つた。

「あんたがこわいから？　ほんとにさつきは面白かった、先にと

くでも塗ってありやあなお面白いんですわ」

「それで私が段々紫色になつて死ねばサ、そうだろう」

「エエ、わたしや人間の死骸と蛇と女郎ぐもとくさつた柿がすき」

「そんないやらしい事ばかり云わないもんだよ、私は段々お前がこわくなつて行く。逃げ出したいと思つてるだけど私はどうしたものか手足を思う様に動かす事が出来ない。私しや心から御前に惚れてるんだろうか、それでなけりやあいつでも私はにげられるはずだ」

「そんな事どうだつてようござんすわ、私の体からしみだすあまつたるいどくにあんたはよっぱらつて身うごきが出来ないんです。あんたが逃げたつて必して逃げおおせないと言う事を私は知つて

ますわ……」

「私がもしにげおおせたらどうする？」

「それじゃ今日つから蛇に見込まれた蛙がうまくにげ失うせるか見込んだ蛇の根がつきるか根くらべをして見ようかしら。」

見込んだ蛇は死んでも蛙をのむと云う事は昔からきまつてる……」

女は前よりも一層ひやつこい眼色をして云った。

「そんなことするにはまだ私はあんまり若い、やめようもう、あんまり先が見えすいて居ていやだから……」

男はかるく震えながらこんな事を云った。

女はいかにも心からの様に笑って立ち上った。その襦袢の上に

お召のどてらを着て伊達をグルグル巻にして机の上に頬杖をついたお龍の様子をその背景になつて居る地獄の絵と見くらべて男はそばに居るのが恐ろしいほど美しくいと思つて見た。御龍のなめらかなひやつこいきめの間から段々自分の命を短くする毒氣が立つて居るらしく思われそのまっくらな森の様な氣のする髪の中には蛇が沢山住んで居やまいかと男は思つた。

「私は御前を知らない方がきつと幸福だつたらうネ又お前だつてそうだったかも知れない……」

「幸福だの不幸だのつてそんな事わたしや考えてませんわ。私は天からこうときまつて生れて来たんだと思つてますもの、私は自分の力を信じてるんですもの……」

「アアほんとうにお前はけしの花の様な女だ」

「私自身でもそう生れついて来たのをよろこんでますわ」

女は男の心の中に自分の毒を吹き込む様にホツと深い息を吐いた。

二人の間に長い沈黙がつづいた。二人の心ははなればなれに手ん手に勝手なことを考えて居た。

「私はもう帰る」

男は思い出した様に立ち上って上^{うわ}んまえをひっぱった。

「そう——」

女は別にとめる様子もせず玄関まで男の後について行つた。

「又今度」

小さな声で男が云つたのに女はただ青白い笑を投げただけだった。

その笑が男には忘られないものの一つだった。しずかな中に女は体を存分にされないで男を自由にすることの出来る自分の力に謝してうす笑をした。いざりよつて丸い手鏡をとつて自分のかおをのぞいた。ふつくらした丸みをもつた頬と特別な美しくしさと輝きをもつた眼、まっかな唇に通つた鼻、顔全体にみなぎつて居る何とも云えないうすら寒い気持——そう云うものを女は女自身に感じて、

「私は若い——そして人より以上の力を神から授かつて居る。私は男をどんな身分の高い人でも何でも、男ならば自分のどれいに

する力を持つて居る」

手かがみをひぎにふせながらよろこびにふるえる声で斯うささやいた。

「私は若いんだ——」くりかえして又つぶやいて手をのばしてあかりをけしてしまった。日の高くなるまで女はすき通る様なかおをしてねて居た。目ざめるとすぐ枕元の地獄の絵を見て女はねむたげな様子もなくさえた笑声を家中にひびかせた。

日暮方、男は又御龍の玄関の前に立った。せまい一つぼのたたきの上には見なれない男下駄がぬぎっぱなしになって居た。男はフツと自分がこの上なくいやに思つて居る事を連想してプツとつばを吐いてあともどりをした。

「もう来るもんか、ウン女があやまつて涙をこぼしたつて来るもんか、売女奴！ きつと来ないぞ、己も男だ」

男はかおをあかくして目をさました子供の様なたわいもない事を自分では真面目に考えて肩を怒らせて居た。

七日ほどの間男は女の家の前さえ通らなかつた。けれ共、それ丈の間の日は必して愉快な日ではなかつた、すきのある様な男の心の前にはすぐこないだの夜の女の笑がおがういた。知らんぷりをされて居るのも氣にかかつた。

「ほんとうにそうだそうだ。己は蛇に見こまれた蛙なんだ、あの女の前には男の力なんかはない己なんだ、阿片をのみ始めたが自分の命の短くなるのを知つて居てもやめられないのと同じ事だ

！

特別に作られた女の、刺げきの多い言葉、様子、目ざしになれた男がたった一人ぽつんとして居ることはとても出来る事ではなかった。わけの分らない悶える心を抱えてこないだよりはずっと衰えた力のない青いかおをして女の家格子をあけた。格子に手をかけてヒョツと見るといつもの笑をかお一つぱいにして女が立つて居た。男は一寸手を引いたけれ共思いきった様にあけてたたきに立った。女はだまったまんま自分の部屋自分の城壁の中に入った。男もそのあとから入って後手に障子をしめながら片ひぎはもう畳について居た。がっかりした様な男の様子を見てお龍はひやっこい声で、

「とうとうかえってきたのねえ、あんたは、家出をして又舞いもどった恋猫の様な風をしてサ」

と云つて一寸男をこづいた。

それをどうのこうのと云うほど男には落ついた心がなかった。手の先をふるわせながら、

「一体マアお前は幾人男を勝手きままにして居るんだい？」

息づまる様な声で男は云った。

「幾人？ 世の中の男はみんな私が勝手きままに出来るもんですわ、私は特別に生れた女です……」

お龍は平気なむしろおごそかな調子で云った。女のバサリと肩になげかけた髪から紫の糸遊が立ってその体を包んで居る様に男

には見えた。

「ああほんとうに私は見こまれた蛙だ！」

男はいかにも力のない声でこう云った。女の目は勝利の嬉しさに夜の闇の中に光って居るダイヤモンドの様にキラメイて居た。

それから又男は一日に一度はキツと女の家格子をあけた。一日中居る事も夜更けてかえる事もあつた。けれ共女が男にさわる事をゆるしたのはそのつめたくて美しい手の先だけであつた。

若い男の血を目に見えない形に表れないところから吸いとつて美しくさはますます女の体にまして来た。女のそばに近よる男は自分の体のやつれたのは知らないで段々美しくなりまさる女を仰ぎ見て居た。

女は二十になった。

男は、

「私は、この頃まるで病んだ様になってしまった。大変やせた、自分でも気のつくほどだもの、私は日ましにやせながら日ましにお前のわきをはなれて居られなくなった」

うるんだ目つきをして斯う云つて居た。

「私達の一番美しい心ばかりを集めて私達の一番立派な血ばかりを集めてお前は日ましに美しくなつて行くんだネエ」

こんな事も云つた。

「私はお前に一番好いところを捧げつくしてしまつたんだから、キツともうじきに死んでし舞うだろう。私は心から御前を思つて

たけれ共お前は私を自分の美しくくなる肥料につかつたつきりなんだものネエ、見こまれたと知つてにげられなかつたんだもの。

私はお前の美くしいと云う事をあんまり見すぎてしまった、それで又私はあんまりお前からくらべると正直だったもの」

やせてめつきり衰えたまだ若い男は毎日毎日来ては女の手にかまつて居た。

「私はもうじき近い内に死ぬと云う事を知つて居る」

と云つた。女はどんな時でもひややかに笑いながら男には手先だけほかゆるさないでつついたり、小突いたりして居た。お龍はその時お女郎ぐもの、大きなのをかつて居た。いつでも自分の指の間に巢を作らせたりくびのまわりを這わせたりして居た。その

時もお龍は自分のひぎの上を歩くかせて自分ではその来手来手をふさいではからかつて居た。こつちに行こうとすると手にぶつかり後にもどろうとするとさえぎられるのでくもはヒラリととんで男の首に這った。それからスルスルと行くさきぎぎにむずかゆい感じを起させながら胸を這って袖口から出た。それを女がつかまえて自分のひぎにのせた。

くもに這われて居る間男は又とないだろうと思われるほどの快い気持になって居た。

だまって目をつぶってクモに這われて居る男を見て女は笛の様な音をたてて笑った。

その日男はたまらないほどあまつたるい気持になって家に帰っ

た。そしてたたみの上にコロリと横になってニツコリといかにも嬉しように笑つて眠に入つた。

翌朝になつても男は笑つたまんまねて居たけれ共もうあつたか味もない口もきかない小ばなの妙にそげたひやつこい肉のかたまりになつて居た。「あの人が一番さきに私を美しくするこやしになつたんだ！」女はこう云つただけだった。

それからあとも男は幾人も幾人も格子を開けては特別に作られた女のそばによつて居た。

男達の心を取り血をしぼつて女は若やかにますますその肌は白く髪は黒く目はかがやいて来た。特別に作られた女を美しくするために純な心を持った男は笑いながら幾人も幾人も死んで行つ

た。男が一人死ぬ毎に女の美は一段進んで男の命と云う貴いものでつくりあげられた美しくしきは銀の光りで月をつなぎ合わせた様なかがやかしさと気のボーツとなるほどのかぐわしい香りをもつて居た。

美しくなりながら女は年をとって行つた。

長い間数知れないほどの男を気ままにもちあつかつて居たけれども女はまだ処女であつた、処女で居られる力を特別に作られた女はもつて居た。

うす暗いローソクの下で地獄の絵にせなかを向けて或る晩女は自分の体のすつかりうつる鏡に立つて居た。頬は丸い唇も赤くて髪も黒いけれども女は目のまわりにあるうす黒いかげと頬にたつ

た一つ茶色のシミの出来たのを見つけた。

「私の美しくしさの下り坂になったしるしだ」

すぐ女は斯う思った。もう今から四五年あとには自分もあたり前の女がする様な事をしなくっちやあなるまいと思った。

自分で特別に作られた女だと信じて居る御龍はあたり前の女のある事をしなければならぬと云う事は死ぬよりもいやな事だった。

も一度鏡の面をジツと見つめた。黒いかげ茶色のしみはたしかにあった。

自分のためにぎせいになった男を見る時にもらす様な落ついたつめたい笑を齒の間からもらした。スルスルと帯をとき着衣をぬ

ぎお女郎ぐもの一つばいに手をひろげた長襦袢一枚になった。鏡を台からはずして畳に置いた。女は笑いながらその上に座った。座った足、手、頭はみんな下のかがみにそのまんまうつて居る。かがみにうつる自分の目を女は見つめて物狂おしい高笑いをした。そして右の手をツとふところに入れてまっしろなやわらかい胸の中にぎって居たお女郎ぐもをはなした。

女は目をパツとひらいてまっさおな笑をもらして鏡の中の自分を見つめた。胸の中の御女郎ぐもはクルクルとすばしっこく這い廻った。胸の御女郎ぐもがジツとしたかと思うと特別に作られた女の体は笑ったまんま見つめたまんまコトリと音をたてて鏡の上にのめった。笑ったまんま女は鏡の中の自分の瞳を見つめて

居る。ローソクはケラケラケラと笑いながら黄色な焰をあげて居る。

お女郎グモはソロソロと胸から首をつたわって女の目に上った。そしてパツと見ひらいたまつげとまつげとの間に銀の様な糸をはり始めた。キラキラとひかるこまかいあみの中から瑤瑠の様な目は鏡の中のあみの中にある目と見合わせて口辺にはまつさおの笑をたたえて居る。特別に作られた女の不思議な姿を朝の光はいっぱいにさして居た。

目の辺に黒いかげはなく頬に茶色のしみもない特別に作られた女はローソクのたわむれを知る事は出来なかった。

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第二十八卷」新日本出版社

1981（昭和56）年11月25日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第6刷発行

※底本では会話文の多くが1字下げで組まれています。注記は省略しました。

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2009年10月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お女郎蜘蛛

宮本百合子

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>